

式 辞

平成 30 年度
卒業式

54 期生 506 名の皆さん、卒業おめでとうございます。

また、前橋育英高等学校第 54 回卒業授与式を挙行するに当たり、多数のご来賓の皆さま、保護者の皆さまにご臨席たまわりましたこと、高い席からでございますが、教職員を代表し、心より感謝申し上げます。

そして、保護者の皆さまにおかれましては、お子様のご卒業を心よりお慶び申し上げます。3 年前、桜の花咲きほころぶなか、その表情にはまだあどけなさが残り、期待と不安をただよわせながら、この場所で入学式に臨んだお子様が、今日こうしてりりしく大人びた姿で式に臨んでいる姿を頼もしく見られているでしょう。高等学校の卒業は、大きな節目です。同時にこれからひとり立ちをしていく日でもあります。その意味で皆さまたちにとって、今日は本当に待ちに待った日だと思います。

これまでお子様の成長の姿を見るにつけ、ほほえましく思ったり、頼もしく思ったり、あるいはハラハラした時もあったことでしょう。その間ずっと温かく見守り、時には叱咤激励したりしてともに歩んでこられました。そして何より安心して学校に通えるよう経済面で支えてこられました。そうした日頃のさまざまな苦勞が実り今日を迎えられましたこと、重ねてお祝いを申し上げますとともに、あらためて敬意を表します。そしてこれまで前橋育英高校の教育活動に対しまして、多大なるご理解とご協力を賜りましたこと、厚くお礼申し上げます。

さて、皆さんの卒業にあたって、託したいことがあります。一つは、今年度のスローガンでもあった Never・Never・Never・GiveUp です。ヒトラーから世界を救った男、イギリスの首相ウィストン・チャーチルの言葉です。ナチスドイツによってイギリスにも侵略の脅威が迫っており、ヨーロッパの運命がチャーチルに委ねられることになった。ヒトラーとの和平交渉か徹底抗戦か、彼は地下鉄に乗り、一般市民の人たちに正直に聞きました。保育士にネバー、看護師にネバー、ペンキ屋さんにネバー、小さい子どもにネバー、みんなの言葉は Never でした。我々は、Never・Never・Never・GiveUp こうして彼は、世界を救ったのです。「どうせ無理」という言葉は、人の可能性を奪います。興味を持たなくなり、やる前に諦め考えなくなってしまいます。「だったらこうしてみたら」という言葉は、人の可能性を広げます。やったことがないことに挑戦し、諦めずより良く求めるようになります。皆さんは、「どうせ無理」と言ったことがありませんか。これからは「だったらこうしてみる」にしてみましょう。

二つ目は、「どうにかする力」をつけてもらいたいのです。自分が将来どのような社会でも、生きていける力をつけることが重要です。どんな社会になっても「働ける」「食べていける」「暮らしていける」ということが大切です。その為には、何が必要なのでしょうか。10～15 年後の世の中はソサエティ 5.0(創造社会)への変革のときを迎えて、今存在しない仕事が全体の 40%になると予測されています。今の私達には、想像が出来ない未知の世界になります。皆さんが、この激動の世界に踏み込んでいく為には、生き抜く為のアイテムが必要です。それは、語学力・コミュニケーション能力・情報処理能力そして海外での経験値などになると考えられます。これからソサエティ 5.0・グローバルな世界に向け、皆さんのさらなる飛躍を期待しています。

以上、前橋育英高校を卒業するにあたり、この3年間で培ってきた知識・技能や感性を大事にし、さらに新たなステージへのチャレンジ、そのための努力により、みずからの夢を思い描きながら、地域や社会に貢献する大人へと成長されることを心より願っています。

それでは、卒業生の皆さんの今後ますますの活躍を期待して、本日の式辞とさせていただきます。

平成 31 年 3 月 1 日

学校法人群馬育英学園 前橋育英高等学校

校長 山田 耕介